平成25年度
No. 4
11月26日

全連小速報

全国連合小学校長会事務局
東京都港区西新橋1―22―14
電話　03-3501-9288
発行人　会　　長　堀竹　　充
編集人　広報部長　大橋　　明

時代の変化をとらえ、子どもが輝く未来のために学校経営に全力を尽くす

第65回全連小研究協議会三重大会成功裡に終わる

平成25年10月17日(木)～18日(金)　三重県営サンアリーナ及び周辺会場

20年に一度の式年遷宮を迎え人々で賑わう伊勢神宮、世界文化遺産の熊野古道、伊勢海老や松阪牛など山海の食の宝庫、真珠の名産地、さらにモータースポーツの聖地など様々な歴史と文化を有する三重県において、10月17日(木)・18日(金)の２日間、第65回全国連合小学校長会研究協議会が全国から3000余名の参加者を得て、盛大に開催された。

本大会は、新たな研究主題を掲げた研究大会の１年目となる。１日目は、開会式・全体会の後、13の分科会に分かれて活発な協議が行われた。２日目には「輝く未来への夢と絆　そしてイノベーション」を主題としたシンポジウムが、萩野慎二氏・曽田　浩氏・原　大樹氏をシンポジストに迎え、小泉与吉調査研究部長の進行で行われた。

閉会式では「翼をください」を合唱し、感動のうちに大会の幕を閉じた。

大　会　主　題

新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く
日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～豊かな未来を切り拓き，夢に向かい，共に生きる子どもが輝く学校経営の推進～

開　会　式

1　開会のことば　柿沼光夫　大会副会長
2　国歌斉唱
3　あいさつ　堀竹　充　大会会長
　稲垣　隆　大会実行委員長
4　祝　辞　文部科学大臣　下村博文様
　（代読　文部科学省大臣官房審議官　義本博司様）
　三重県知事　鈴木英敬様
　（代読　副知事　植田　隆様）
　三重県議会副議長　前田剛志様
　三重県教育委員会教育長　山口千代己様
　伊勢市長　鈴木健一様
　（代読　副議長　松下　裕様）
5　来賓紹介
6　閉　式

学校経営が充実するための大会に

堀竹　充　大会会長

第65回全連合小学校長会研究協議会三重大会が20年に一度の式年遷宮祭の年に伊勢・鳥羽を会場に開催できることを心からお喜び申し上げる。大臣官房審議官義本博司様、三重県副知事植田隆様、三重県教育委員会教育長山口千代己様をはじめ多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り盛大に開催できることに心よりお礼申し上げる。

教育再生実行会議から数次にわたる教育再生の提言が出され、中央教育審議会において実施に向けた細部の審議がされるなど、教育改革の動きが活発となっている。児童の健全な成長や

世界で活躍する人材の育成を保証する学校づくりの推進は、校長の本質を見抜く深い洞察力と改革のための明確な方針・実行力にかかっている。そしていかなる困難があろうともやり抜く強い意志と学校経営の専門家であるという強い自負をもち、ぶれない逃げない学校経営を進めることが重要である。本大会がこのようなことを確認する機会となることを心より願っている。

全連小は本大会より研究主題を「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とした。この研究主題の下、未来を見据えた教育の在り方を探り、社会におけるイノベーションを生み出す基礎を一人一人の児童に育むとともに、国際社会の中でリーダーシップを発揮できる日本人を育成し、全ての人々が心豊かに生きることができる社会を実現できる人材の育成を目指し、研究活動を推進していく。そのために一人一人の教員の資質能力の向上、教育課程の見直し・改善・充実、人間性豊かな社会を築くために必要な児童の資質・能力の解明、社会の一員であるとの自覚を高める指導の推進、協力し合って課題の解決を進める学習活動の開発が重要である。本研究大会でもこのような視点で協議を深め、多くの成果を上げることを期待している。

三重県校長会並びに東海北陸地区連合小学校長会は「豊かな未来を切り拓き，夢に向かい，共に生きる子どもが輝く学校経営の推進」を副主題に掲げ、研究を深めてこられたことに敬意を表する。

また、本大会で26件の実践報告がなされる。教育の今後の有り様を示してくれることに対して感謝を申し上げるとともにその成果に大いに期待をしたい。

この大会の研究成果を各県にもち帰り、各県の校長の学校経営が充実するよう先頭に立って実践を積み重ねて欲しい。

新たな研究主題への取組は、我々にとって大いなる挑戦である。その充実のために、組織を挙げて「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の実現を目指し、力を合わせていきたい。

全連小三重大会稲垣実行委員長をはじめとする三重県校長会や各県校長会役員の皆様に感謝を申し上げる。

時代の要請に的確に応えていく

稲垣　隆　大会実行委員長

全国各地から3000名を超える校長先生方を迎え、第65回全連小三重大会を開催できたことは大いなる誇りである。

「えにし おかげさま そして新しい歩みを」を大会コンセプトにし、「子どもの未来を拓く教育のイノベーション」をキーワードに研究協議を行う。「おかげの心、おもてなしの心」をもって全力でお迎えをする。

社会が著しく変化し先行きが不透明な状況にあって、教育を巡る課題もますます複雑多様化し、その解決が急がれている。また、人間性豊かな社会を築く期待が一層強くなってきた。自らの生き方を語り、信念と自負をもって挑戦し続け、教育の不易と流行を見極め質の高い教育の経営手腕やリーダーシップを発揮し、新しい時代の要請に的確に応えていけるよう教育のイノベーションを果たしていく必要がある。

三重大会から大会主題が新しくなる。これまでの教育研究の成果に学び、「豊かな未来を切り拓き，夢に向かい，共に生きる子どもが輝く学校経営の推進」を副主題に定め、真摯に研究主題に迫ろうとしている。

５つの研究領域に13の分科会を新たに設置し、研究協議に一層の広がりと深まりを求めていきたい。三重大会を縁ととらえ、学校・家庭・地域が一体となり子どもの大いなる可能性を引き出し、輝く未来作りに向けて取り組むことを基本理念とする三重の教育文化に触れていただくことを期待したい。

本大会の開催に当たり、文部科学省、三重県、伊勢市・鳥羽市並びに各教育委員会の皆様、全連小並びに東海北陸地区連合小学校長会をはじめ、関係機関・団体の皆様のご理解ご協力ご支援に感謝申し上げる。本大会が充実した研究協議会となることを祈念し、歓迎の言葉とする。

下村文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省大臣官房審議官　義本博司様

第65回全国連合小学校長会研究協議会三重大会

が盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げる。

第２次安倍内閣は教育再生を最重要課題の一つとして取り上げ取り組んでいる。日本の将来を担う子どもたちは国の一番の宝であり、教育は国の根幹を作る国の最重要施策であるという考えに基づき、21世紀の日本にふさわしい教育体制を構築するため、教育再生実行会議が議論を開始した。これまでに、いじめの問題への対応や教育委員会制度の在り方について提言がとりまとめられた。

いじめ問題に関しては、規範意識や自主性・社会性を育む道徳教育の充実、関係者がいじめに立ち向かう責任体制の整備、いじめられている子を守り、いじめている子には毅然として適切な指導を行うことの徹底を図る。社会総がかりで子どもを支えていくために、地域とともにある学校作りに取り組んでいく。

新学習指導要領が全面実施されて３年目となる。知徳体のバランスのとれた生きる力を育むことを目指している。校長のリーダーシップの下、新学習指導要領を踏まえた教育の実践に取り組んでいただいているが、各学校の教育目標を明確にした上でPDCAのサイクルでより効果的な教育活動に取り組んでいただきたい。

本年より新しい研究主題を掲げての取組は、意欲的であり期待している。

今大会が所期の目的を達成するとともに、全連小の益々のご発展を祈念し、お祝いの言葉とする。

鈴木三重県知事祝辞代読（要旨）

三重県副知事　植田　隆様

変化の激しい時代の中で子どもたちを取り巻く環境は、ますます多様化・複雑化している。

三重県では平成23年度に策定した三重県教育ビジョンにおいて、一人一人が主体的に学習に取り組み、社会人・職業人として自立するために必要な能力や態度・知識を身に付けるとともに安心して学習できる環境作りを進めることを目標に、その行動計画の中で「学力の向上」「地域に開かれた学校づくり」「特別支援教育」「学校における防災教育」の４つを掲げて、取組を進めている。子どもの学力向上総合プロジェクトにおいて、県民総参加における学力向上を進めていきたいと考えている。本大会がご参会の皆様によって実りある大会となることを祈念する。

三重県議会祝辞（要旨）

三重県議会副議長　前田剛志様

学校を取り巻く環境は、急速な少子高齢化や経済のグローバル化、IT化など社会情勢のめまぐるしい変化で大きく変わってきている。昨今の教育現場は子どもたちの学習意欲の低下やいじめ・不登校などの様々な課題に直面している。国においては教育改革が進められ、本年６月には第２期教育振興基本計画が策定されるなど様々な改革が進んでいる。これらの改革を実りあるものとし、子どもたちの成長に繋げていくためには、学校現場のたゆみない取組が不可欠であり、その責任者である校長の役割は重要である。

本大会が学校経営の一層の充実を図り、我が国の次代を担う子どもたちの健全育成に向け、実り多きものになることを期待する。

三重県教育委員会祝辞（要旨）

三重県教育委員会教育長　山口千代己様

近年、教育が話題にならない日はない。資源の乏しい我が国においては人材育成こそが国の命運を左右するものとして国民から期待されている。第２期教育振興基本計画は、知識を基盤とした自立・協働・創造モデルとして生涯学習社会の実現を旗印に教育行政として取るべき方向性が示している。その中で生涯にわたる学習の基礎となる、自ら学び考え行動する力を確実に育てることや必要な知識能力の確実な習得に向けた取組の必要性が述べられている。本県では三重県教育ビジョンにおいて、主体的に学び、自信と意欲、高い志をもって輝く未来を切り拓いていく自立する力と、グローバルな視点をもって他者との関わりの中でともに支え合い新しい社会を創造していく共生する力を育むことを基本理念として、様々な取組をしている。平成24年度から三重学力向上県民運動をスタートした。

本大会が研究主題の下、全国の優れた実践事例を基に学校経営に責任をもつ校長の役割と指導性について研究協議をされることは誠に意義深い。様々な研究協議の中で質の高い学校経営について実現されることを期待している。

鈴木伊勢市長祝辞代読（要旨）

伊勢市副市長　松下　裕様

教育現場では子どもの学ぶ意欲や学力・体力

の低下、いじめや体罰など様々な課題に直面している。

教育を巡る様々な課題と真摯に向かい合い、たゆまぬ学校改善に取り組んできた校長先生方の努力によって、地域・家庭と一体となった子どもが輝く学校が実現することと期待している。

人口減少や少子高齢化は避けられるものではないが、伊勢市では笑う子である「笑子」、幸せな年齢の「幸齢」を目指している。教育においても「ドリームプロジェクト」を推進し、確かな学力・豊かな心・健やかな体を育む取組を進めている。子どもたちの輝く未来のため学校と行政が手を取り合って進みたいと考えている。

全連小三重大会は第４回大会が当時の宇治山田市で開催されてから60年ぶりの大会となる。おもてなしの心をもって歓迎したい。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省大臣官房審議官　義本博司様

１　道徳教育の充実

道徳教育の充実に関する懇談会を設置し、審議を進めている。12月中に報告書をまとめる予定である。そこでは、目標や内容の在り方、授業の在り方とその充実、教科化、教科となった場合にはその評価はどうなるのかなどが議論されている。学校における道徳教育推進教師を中心とした研修の充実や大学の養成課程の中での履修についての検討も行われている。

教材は副読本や心のノートを使用しているが、検定教科書を作るのかなどの議論も進んでいる。12月にまとめをし、26年の早い時期に中教審に諮問したい。

現在、「心のノート」を充実させて配布するために改訂作業をしている。内容を現在の２倍程度に増やす予定である。心のノートは新年度に配布できるように作業中である。現場で使いやすいように指導書の作成なども検討している。

２　土曜授業に関する検討

文科省は教育課程内外の学習や学校外での活動を含む広義の子どもたちに関わる活動を「土曜授業」と考えている。地域と家庭が連携し、総がかりで土曜日の活動を作っていくという趣旨である。

省令を改正し土曜日に授業を可能にする方向で検討しているが、土曜日の教育環境を整えるという趣旨に変わりはない。地域と連携・外部人材の活用など様々な取組が重要である。学校支援地域本部等との連携も必要である。

３　外国語教育の推進

グローバル人材の育成のため外国語教育に力を入れて行く必要がある。現在は、小学校と中学校ではギャップがあるが、小中の連携を図っていくことが大切である。今後、小学校高学年での教科化や中学年での英語活動について検討を進めていく。学習時間の確保が課題となっているが、教科化を進めるのであれば専門の教員が必要になる。将来的には一般の教員が指導することが大切であり、そのための教員養成を進めていくことも重要である。大学入試改革と切り離しては考えられない。

４　全国学力・学習状況調査

結果の公表が話題となっているが、結果を踏まえてどのように授業改善を図るのかが重要である。課題を明らかにして、改善に取り組んでいって欲しい。今年の結果として県ごとの差が縮まった。結果の分析を基にどう改善するのかを考えるためのツールとしてとらえていくことが必要である。

５　教職員等の指導体制の整備

「教師力・学校力向上７か年戦略」により、少人数指導や個別の教育課題への対応をしていく。教育課題に応じた定数改善を図っていく予定である。TTが効果的であったり、習熟度別の方が効果的であったりする。様々な状況に応じて活用できるようにしていく。

少子化に向かっているので、学級編制の標準について検討することも重要になっている。また、メリハリのある教員給与についても引き続き検討していく。

６　生徒指導の充実

実態調査をしっかりと行って欲しい。いじめの有無で評価するのではなく、起きてしまった際の迅速な対応も重要である。いじめ防止対策推進法が成立し、実効のある対応をするとともに予防する学校体制を作っていくことが大切である。学校は基本方針を策定し、いじめ防止の対策の組織を作ることを早急に行って欲しい。

７　教育委員会制度改革

教育の中立性や公平性を確保することが重要であり、そのためにどのようにしたらいいかが議論の中心となる。教育長が学校教育の責任者であること確認していきながら、学校により多くの権限を移していくようにしたい。

第１日　全　体　会

司　会　　木戸豊志　大会実行副委員長

1　本部報告

2　大会主題・研究課題趣旨説明

3　大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

高橋俊明　対策部長

現在、新たな時代の要請に応えるための学校教育の充実を図る方策について、様々なところで検討が進められている。全連小は、このような状況を踏まえつつ、教員の子どもと向き合う時間の確保、質の高い教育の推進のための施策について、様々な機関・団体と積極的に働きかけを行ってきた。今後も各都道府県校長会、地区校長会との連携を一層深め、全連小としての組織・機能の充実を図るとともに、関係機関との連携を密にし、本会としての方針や活動内容、その成果を発信し、積極的な提言を行っていく。

本年度の主な本部の活動について報告する。

５月23日、第214回理事会が開催され、会長、副会長、常任理事の互選、及び監事の選出を行った。

５月24日、第65回総会・研修会が行われ、１～５号議案すべて承認された。

７月８日には、常任理事による要望活動を行い、文部科学省・財務省・総務省の大臣・副大臣・政務官・省内各課長を訪問し、要望書を提出した。

７月27日～８月２日までの７日間、14名の参加者により、ニュージーランド海外教育事情視察を行った。現地の学校３校とクライストチャーチ教育省を訪問した。

８月30日、被災地視察及び仙台市・宮城県・岩手県・福島県の校長会長はじめ役員の皆様にお集まりいただき、連絡協議を行った。

また、３地区対策・調研担当者連絡協議会が、９月26日、10月３日、４日に東京、大阪、福岡の会場で開催された。

今後とも、全国の小学校の教育活動充実のため、協力をお願いする。

大会主題・研究課題趣旨説明

稲森穂積　三重大会研究部長

去来抄に、俳聖芭蕉の言葉として「不易を知らざれば基たちがたく、流行知らざれば風新たならず」とある。三重県小学校長会は、教育における不易と流行を見極め、大会主題に迫るため、研究のキーワードを「子どもの未来を拓く教育のイノベーション」とし、取組を進めてきた。

今、先行き不透明で、変化の激しい社会であるからこそ、子ども一人一人がこうありたいという夢をもち、未来に向かう意欲と自信にあふれた輝きをもつことが求められている。そのためには、子どもたちに「自立する力」と「共に生きる力」を育んでいかなければならない。これを受け、大会主題の下、副主題を「豊かな未来を切り拓き、夢に向かい、共に生きる子どもが輝く学校経営の推進」と設定した。

子どもたちの輝く未来づくりのために、今、何ができるのか、今、何を変えなければいけないのかという視点に立ち、校長としての生き方を高め、自信と誇りをもってリーダーシップを発揮し、子どもの未来を拓く教育のイノベーションを創出していきたい。

研究領域・研究課題についても、大会主題とともに分科会設定も全く新しくなり、本大会そのものがイノベーションの実践であり、関係性を重視した５領域、13分科会を設定した。本日午後の分科会において、一人一人が我が校のイノベーションにつながるキーワードを見付けたり、確認したりできることが何よりの願いである。

＜分科会の研究課題及びリーダーシップの視点＞

Ⅰ　学校経営

第１分科会「経営・ビジョン」

研究課題：創意と活力に満ちた学校経営ビジョン

視点１：将来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定

視点２：学校の役割を明確にした創造的な学校経営の推進

第２分科会「組織・運営」

研究課題：学校経営ビジョンの実現と活力ある組織づくり
視点１：学校経営ビジョンの実現に向けた運営組織の構築
視点２：活力ある運営を実現するための組織の活性化

第３分科会「評価・改善」

研究課題：教育の改革を進める学校づくりと評価
視点１：新たな知を拓く資質・能力を育成する学校経営改革の推進
視点２：学校づくり・人づくりを確かにする学校評価・人事評価の工夫

Ⅱ　教育課程

第４分科会「知性・創造性」

研究課題：知性・創造性を育む教育課程
視点１：しなやかな知性と豊かな創造性の育成
視点２：しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

第５分科会「豊かな人間性」

研究課題：豊かな人間性を育む教育課程
視点１：新たな社会を生き抜く人権感覚の育成
視点２：豊かな心を育成する教育課程の編成・実施・評価・改善

第６分科会「社会形成能力」

研究課題：社会形成能力の育成を目指す教育課程
視点１：社会に貢献する力の育成を目指す教育活動の創造
視点２：自立した社会人を育成するための教育課程の編成・実施・評価・改善

Ⅲ　指導・育成

第７分科会「研究・研修」

研究課題：学校の教育力を向上させる研究・研修の推進
視点１：教員の資質・指導力が高まる校内研究体制の推進
視点２：教員に展望や参画意識をもたせる研修の推進

第８分科会「リーダー育成」

研究課題：これからの学校を担うリーダーの育成
視点１：確かな展望をもち行動できるミドルリーダーの育成
視点２：変化の時代を生きる人間性豊かな管理職を担う人材の育成

Ⅳ　危機管理

第９分科会「学校安全」

研究課題：命を守る安全教育の推進
視点１：自ら判断・行動できる子どもを育てる安全教育の推進
視点２：地域との連携を図った意図的・計画的な取組の推進

第10分科会「健全育成」

研究課題：児童の健全育成と危機管理の推進
視点１：いじめや不登校等を生まない学校づくりの推進
視点２：危機管理に強い組織育成のための意図的・計画的な取組の推進

Ⅴ　教育課題

第11分科会「健康・環境」

研究課題：未来を生きる力を育てる健康教育・環境教育の推進
視点１：健やかな体を育てる健康教育の推進
視点２：実践的な態度を育む環境教育の推進

第12分科会「自立と社会性」

研究課題：自立を図り社会性を育てる教育の推進
視点１：児童の自立を図る特別支援教育の推進
視点２：豊かな未来の実現に貢献する力を育むキャリア教育の推進

第13分科会「連携・接続」

研究課題：家庭・地域・異校種等との連携・接続の推進
視点１：家庭・地域等と連携し、社会貢献する学校づくりの推進
視点２：幼・保・小・中等との円滑な接続のための組織的な取組の推進

第2日　全　体　会

司　会　　木戸豊志　大会実行副委員長

1　研究協議のまとめ

2　大会宣言文決議

田邉正明　大会宣言文起草委員長

◇　シンポジウム

研究協議のまとめ

稲森　穂積　三重大会研究部長
坂倉由美子　　研究副部長

本大会は、ほとんどがシャトルバスでの移動であったのでご迷惑をおかけしたが、皆様方の協力で、分科会の時間を予定通り確保することができた。感謝申し上げる。分科会の進行状況については、キーワードによるグループ討議に積極的に取り組んでいただいた。グループ討議の後の発表もキーワードを簡単な図に表わすなど工夫されており、大変分かりやすかった。もっと多くのグループに発表していただけるとよかったという声もあった。すばらしい発表をいただいた校長先生方に敬意を表したい。

1　キーワードによる領域ごとの報告

領域Ⅰ「学校経営」におけるキーワードは、「責任者としての展望を明確にもつ」「経営参画の意欲を喚起する組織づくり」「校長のマネジメント力を磨く」などで、先見性をもって取り組む校長の経営手腕について方向を示した。

特に第３分科会「評価・改善」では、教職員とともに学校の課題の改善策を考えていくことで、参画意識を高めたり、改善策を組織的に実践しようとする人材を育てたりする大切さが討議された。

領域Ⅱ「教育課程」では、「教育課程を見直し続ける組織づくり」「地域や子どものつながり、また未来へのつながりを大切にするための連携・協働・調整」などのキーワードが出された。

領域Ⅲ「指導・育成」でのキーワードは、「教職員を育てる明確な目標設定と主体的に取り組むチームづくり」「意図的、計画的なリーダーの育成」などが出された。学校の教育力を向上させるために、高い指導力を有した教職員を育成する組織的な取組は、新たな知を拓くことにつながる大きなキーポイントになると思われる。

次に、領域Ⅳ「危機管理」でのキーワードとしては、「自ら判断・行動できる安全教育の推進」「地域・保護者を巻き込んだ連携と協働」などが出された。防災・安全と児童の健全育成に関する課題を未然に防止し、適切な対応をしていくという観点から、それぞれの体験や実践に基づいた報告や討議がなされた。

最後に、領域Ⅴ「教育課題」では、特別支援教育や環境教育など今日の教育における重要な課題を中心に、「未来を生き抜くための行動力の育成」「共に生きることを目指す学びの場づくり」「双方向からの連携や協働」などのキーワードを確認することができた。

2　分科会の討議のまとめ

大会主題に迫るため、５つの領域を設定し、分科会を設けたことは、関係性を重視した新たな切り口となり、今後も継続した取組につなげていくことが重要と考える。13の分科会設定については、研究の実践推進や討議の深まりという観点から、今後工夫改善の余地があるとの指摘もいただいている。

三重大会は新たな大会主題での初めての大会だった。この大会の中で築かれたことに目をとめ、今まで積み重ねた経験を引き出し、つなぎ合わせ、関係性を問い直すことを始めてみてほしい。本大会の参会者一人一人が、自身のキーワードを確かなものとし、校長としての生き方を高め、明日からの学校経営に生かしていくとともに、全国の校長先生方に発信いただき、今後の大会の充実・深化に向けて、役立てていただくことを確認したい。

第65回全連小三重大会の研究のキーワードは、「子どもの未来を拓く教育のイノベーション」である。子どもを信じ、子どもたちの大いなる可能性を引き出す教育活動を確かに進め、自立する力、そして共に生きる力を育んでいきたい。

以上で、研究協議のまとめとする。

大　会　宣　言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ね、着実に成果を上げてきた。

第60回香川大会から大会主題「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」のもとに、第64回奈良大会に至る５年間、各大会の特色を生かしながら、その実現に向け鋭意努力して実践的に研究を進めてきた。

現在、我が国は、少子化・高齢化、グローバル化が一層進むなど、社会が激しく変化し先行きが不透明な状況にある。国においては、第二期教育振興基本計画が閣議決定され、その具現化が進められている。また、教育再生実行会議から数次にわたる提言がなされる等、新たな時代の要請に応えるための学校教育の在り方と方策が検討されている。

このような国の動向を注視しつつ、これまでの研究と実践の成果と課題を受け、本大会から大会主題を「新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く　日本人の育成を目指す小学校教育の推進」と定めた。

各小学校は、未来社会の形成者の育成を目指す教育のイノベーションの創出を図り、東日本大震災の教訓も生かして「生きる力」を育んでいくことが重要である。どのような状況にあっても未来を自ら切り拓こうとする「自立する力」と、縁（えにし）と御蔭（おかげ）の心を大切に、他者と協働し人間性豊かな社会を創造する「共に生きる力」を身に付けた日本人を育成することが責務である。

私たち校長は、三重大会における副主題「豊かな未来を切り拓き、夢に向かい、共に生きる子どもが輝く学校経営の推進」を基盤として、小学校教育の推進に全力を傾注し、国民の信託に応えようとするものである。

ここに、第65回全国連合小学校長会研究協議会三重大会の総意に基づき、次の決意を表明し、その実現を期する。

記

一、新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く　日本人の育成
一、豊かな未来を切り拓き、夢に向かい、共に生きる子どもの育成を目指す学校経営の推進
一、「生きる力」を育てる創意ある教育課程の編成・実施・評価と改善
一、道徳教育を中核に、命の尊厳を重視した心の教育の一層の充実
一、主体的に判断し行動できる子どもの育成を目指す防災教育の推進
一、学校の自主性・自律性の確立と家庭・地域社会との連携による教育活動の充実
一、安全で安心できる教育環境づくりの一層の推進
一、校長自らの研鑽と教職員の資質・能力の向上を図る現職教育の充実

右、宣言する。

平成25年10月18日

第65回全国連合小学校長会研究協議会三重大会

シンポジウム

『輝く未来への夢と絆　そしてイノベーション』

（要　旨）

シンポジスト

日本電気㈱宇宙システム事業部プロジェクト推進部プロジェクトディレクター　萩野慎二氏

㈱モビリティランド代表取締役社長　曽田　浩氏

マジシャン　原　大樹氏

コーディネーター

全連小調査研究部長　小泉与吉

小泉　シンポジウムの流れとして、始めに「夢や希望との出会い」「チームの中で夢や希望をどのように実現していったのか」について伺い、ここまでを前半として、後半は、「これからの夢や挑戦について今考えていること」を、最後に「学校教育、子どもたち、校長先生方への期待」ということでお話を伺いたい。

萩野　３年前地球に帰ってきた小惑星探査機「はやぶさ」に関わるプロジェクトマネージャーを務めていた。「はやぶさ」のミッションとは、地球を脱出して、小惑星「イトカワ」に接近し、観測を行った後、「イトカワ」に着地してサンプルを採って、カプセルに入れ、地球に帰って来るというものである。この地球に帰って来るというミッションは、世界的にも例のないことだったので、これを設計に取り込むことは非常に難しいことだった。このようにイメージを形にするということがシステムエンジニアにとっては醍醐味であり、それをやりたいと学生の時から思っていた、そのど真ん中が私にとって「はやぶさ」だった。

曽田　モビリティランドは、鈴鹿サーキット、ツインリンクもてぎという、二つの営業所をもっている、ホンダの100%子会社である。鈴鹿サーキットは、日本初の国際レーシングコースとして、1962年開業。63年に、ホンダはS500、T360の発売をし、日本で最後発の4輪メーカーになったが、同時にＦ１のマシンも開発をしており、64年に苦心の末開発したマシンでＦ1に初参戦。65年に改良を加えたRA272という車で、最終戦のメキシコグランプリで初優勝を飾った。

Ｆ1との出会いに関して、本田宗一郎の思想は、「やってみもせず何がわかるんだ」というものである。世のため、人のために、世界にないものを作る。そのために技術を磨き、技術者を育てる、そのためのレースであるということだ。

原　（マジックのパフォーマンスを行った後）

僕が生まれ育ったのは、奈良県の山奥、十津川村というところだ。

5歳の時、家族の旅行で東京へ行き、母と井の頭公園でピエロがやっていたマジックを見て、一瞬でマジックのとりこになった。その瞬間マジシャンになりたいと思った。そこから、テレビのマジックをVTRに録画して、テープがすり切れるぐらい何回も再生してマジックを覚えた。初めて15歳の時、埼玉で開催されたマジックの大会に出場し、優勝できる自信があったにもかかわらず、結果は８位だった。一匹狼でやってきた僕にとって、日本のマジック界はなじめず、アメリカでトップを取ってやろうという思いで、アメリカに旅立った。

曽田　Ｆ１という世界最高峰のレースを日本で見せたいという思いから、Ｆ１招致活動を進め、数々の交渉を経て1987年に初めて鈴鹿で開催されることになった。開催が決まってからも、時速300キロを超えるＦ1は安全や医療などの要件は我々の想像を遥かに超え、開催まで多くの苦労があったが、決勝当日、チームの関係者から、運営の計画性やドライバーを温かく迎えてくれる対応に感謝の声が上がった。その年、Ｆ１を開催しているレースコースの中でベストであるという賞を受賞している。以来20年にわたる開催を行い、鈴鹿市はモータースポーツ都市宣言をするなど、地域を挙げて盛り上げていただいている。

原　2009年にラスベガスの世界大会でグランプリを取ってから、世界的に有名なマジックプロデューサーと出会い、今では多くのチームメンバーとともに、ショーを作っている。今年、ラスベガスでイリュージョンと呼ばれるマジックに挑戦したが、数秒のタイミングを間違えるだけで、死に至る場合もある。お互いの信頼関係

を築くために、僕自身なるべく素を見せられるよう空気を作っている。また、たくさんの方々が陰で僕のショーのために動いてくれているので、チームのメンバーには直接言葉で感謝の気持ちを表わすよう心がけている。

萩野　「はやぶさ」の開発を始めたのが、1996年。2003年に打ち上げ、2010年に帰還するまで14年間、関わっている人間は次々に変わった。設計に関わる初めてのチームの人数は比較的少なく、その後製作が始まると、非常に多くの組織が動くようになる。日本で130社近く今回の開発に関係したと言われている。ここでも重要なのは設計会議で、システム全体を確認しながら進んでいくことである。その後、探査機ができると試験のチームが出てくる。それぞれの段階で、主役が交代していく。各主役とベクトルを合わせながら進んでいくということが、こういうハードウェアを作る際は重要なことだった。その後、打ち上げてしまうと、「はやぶさ」はJAXAに引き渡され、７年間、10数名の混成チームで運用していく。運用になるとそれぞれがエキスパートになってしまうため、一人でも欠けた場合どうカバーしていくかということが大切なマネジメントだった。

原　今、やりたいのは宇宙空間でのマジックである。未だかつて、宇宙空間でマジックをやったものはいない。宇宙一のマジシャンになることが、今の僕の夢である。もう一つの夢として、パフォーマンスとしてではなく、マジックのワークショップを、たくさんの学校でやっていきたい。マジックには国境がない。マジックを通して、子どもたちのコミュニケーションのきっかけになれればと思っている。

曽田　Ｆ1は、世界の３大スポーツの一つである。これからもホンダはモータースポーツのリーディングカンパニーとして最高峰のＦ1に挑み続けるということが将来の夢であり、2015年から再びホンダはマクラーレンと共同でＦ1に参戦すると発表したところである。

萩野　今、「はやぶさⅡ」というプロジェクトが進行している。来年度中に打ち上げの予定で、2018年に小惑星に到着し、2020年に帰ってくるという計画である。「はやぶさ」が30年前提案され、学生がそれをふくらませて、30年後に現実になった。木星や火星の本格探査をするのはまさに今の小学生である。我々は種をまくにすぎない。「はやぶさ」の経験をきちんとフィードバックし、現実的な話をして、この先若い人たちがやっていけるという雰囲気づくりに努めていきたいと思っている。

当初、「はやぶさ」の計画はかなり無謀な挑戦だった。そこで、JAXAは何をしたかというと加点方式にした。新しいことを行うことに対して、誰が減点できようか。子どもたちに対して、新しいこと、自分からやっていることに対しては、ぜひ加点でやってほしいと考える。

曽田　ホンダがＦ1に挑戦するのは、世界最高峰のものに果敢にチャレンジしていくことで人材が育っていくということが最大の理由である。本田さんの口癖である「やってみもせんで何がわかるか」という言葉からも、子どもたちに失敗を恐れず、チャレンジすることを奨励していただければ幸いである。

原　最近、日本に帰ってくるたびに、日本の子どもたちに夢がないとよく聞く。しかし、僕が日本のいろいろな小学校でショーをさせていただいた後、いつも児童から手紙をいただく。その中に、皆それぞれの夢が心の中にあることがわかる。今日、校長先生方に一つお願いしたいのは、子どもたちの夢を応援してあげる、ほめてあげる先生になっていただきたいということだ。僕も小学生の頃、全校児童90名ぐらいの学校で、校長先生に覚えたてのマジックを見せ、「すごいね、原くん」とほめてもらったとき、すごく嬉しかった。児童の夢を言葉で応援してあげる、温かい学校を作っていただきたいと思う。

閉　会　式

1　開　　式

2　あいさつ　　堀竹　充　大会会長
稲垣　隆　大会実行委員長
柿沼光夫　次期開催県代表

3　閉会のことば　　石丸真平　大会副会長

第215回　理　事　会

10月16日（水）午後１時45分開会　　エクシブ鳥羽アネックス

進行　宇田 庶務部長

1　開会のことば　　柿沼 副会長

2　会長あいさつ（要旨）　　堀竹 会長

台風26号が接近してきており、各地での被害も聞こえてきている。本日の理事会にお集まりいただくのに様々な苦労があったことと思う。お集まりいただき感謝申し上げる。

第１は、中央教育審議会の動向である。今一番進んでいるのが教育制度分科会である。ここでは新たな教育委員会制度について審議が進んでいるが、教育委員会にもたせる機能や首長部局との関係についての審議が進む状況である。

教員養成部会はまだ十分な審議が進んでいないのが現状であるが、教員免許更新制度の改善に関わる専門家会議が議論を進めている。現代的な諸課題に関わる免許状講習の内容について具体的な審議をしている。また免許状更新講習と現職研修との役割分担との在り方について、特に10年次がダブルということについては制定されたときから問題視されているので、この点について審議している。さらに、免許更新の制度の運用について現状の分析と課題の解決についても審議している。また、平成26年度の概算要求では教員の資質向上と教員の定数改善に関しての予算措置が盛り込まれた。

教育課程部会の中の道徳教育の充実に関する懇談会では、新たな道徳教育の枠組みについて審議している。また土曜授業の実施についての検討内容について報告があった。

各部会から諮問された専門家会議では11月から12月を目途として実質的な審議が始まる状況である。

全連小としては、審議内容について積極的に意見表明をあらゆるチャンネルを使って行っていく。

第２は、全国学力・学習状況調査の結果の公表についてである。大阪市では教育委員会の管理規則を変えて、校長が公表することを義務付けるというような動きがある。今までと違っているのは、法の改正による公表の義務を校長に課したということは大きな課題である。義務化されれば、それに従わない校長には罰則規定が適用されることになり、今までとは違う形で学力調査の開示を求める動きがある。

様々な教育改革の動きの中で、次々と新しい教育の方向性が発信されてきている。このような状況の中で校長として、それが実際に運用された場合に、子どもにとってどのような影響があるのかを検証するこが重要な時期となっている。

教育をよくするか否かは校長会の発信力にかかっている。各都道府県の校長会も関心をもち、それぞれの意見の表明をお願いしたい。

第３に、三地区対策・調研担当者連絡協議会であるが、今年度も様々な情報交換がなされた。全連小としてこの結果をまとめて、各校長会にその結果を返していくようにしたい。それを積極的に使って次年度の教育活動の充実に活用していただきたい。

学校行事の忙しい時期であるが、今この時期にやらなくてはならないことは何かを、皆さんとともに考えていきたい。理事会での話し合いの結果を各都道府県にもち帰り、それぞれの校長会の活動に活用していって欲しい。

3　報　告　　司会　石丸 副会長

⑴　会務・事業・活動の大要　　宇田 庶務部長

⑵　会計　　長谷川 会計部長

・基金管理状況　　・負担金納入状況

⑶　研究大会について

・三重大会について　　稲垣 三重県会長

・埼玉大会について　　柿沼 埼玉県会長

開催日：平成26年10月23日（木）・24日（金）

副主題：「共に生きる知恵を磨き、心結ぶ未来社会をつくる　誇り高き子どもの育成」

⑷　要望活動について　　高橋 対策部長

・平成26年度の「小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算に関する要望事項」を

文科省２班、財務省１班、総務省１班の合計４班に分かれて行った。

⑸　東日本大震災被災地視察等について

①　被災地視察及び連絡協議会報告

高橋 対策部長

８月30日(金)・31日(土)にかけて、堀竹会長他４名で被災地に伺い被災状況を視察するとともに連絡協議会を行った。現地視察では避難指示の難しさなどを実感した。協議会では様々な問題が提起された。今後、学習支援加配措置の継続や子ども・家庭への支援を国に要望していく。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置などの人的措置、教材の整備などが必要となっている。

②　被災三県より

○陣ヶ岡 岩手県会長

各校での取組が充実してきており落ち着きが出てきている。しかし、時間が経つことで見えてくる課題も明らかとなってきた。コミュニティーができていない現状があり、対応に困難さがある。自立を目指しているが、先が見えない不安がある。

○堀越 宮城県理事

被災した校舎では今なお津波の爪痕が残っている。２年が経過した今になって子どもたちが自分の心情や悩みを語り始めた。これからも心のケアが必要である。楽天の優勝が心に明るさをもたらす原動力となっている。復興ソングができたので、後世に伝えていきたい。

○土屋 福島県理事

原発や汚染水の問題がなお続いている。富岡町で児童生徒の意識調査を行った。友達と離れたことを不便に感じたり、将来の帰郷を希望しない児童が増えたり、今後も避難先の学校に通いたいという希望者が増えたりしている。災害が風化されていくことが心配である。今後も被災県に関心を寄せて欲しい。

⑹　その他

・全国学力・学習状況調査結果の公表について　小泉 調研部長

10月10日に会長名で公表に対しての意見書を大阪市教委へ送付した。

・海外教育事情視察報告　高橋 団長

・日韓教育文化交流の報告　小泉 調研部長

４　情報交換「退職後の校長の処遇について」

司会　島﨑 常任理事

再任用校長の制度がある東京・大阪、再任用制度のある長崎、再任用制度のない沖縄、再任用を検討中の北海道の報告の後、質疑応答を行った。

東京　再任用校長はフルタイムが基本。短時間の場合には校長ではなく日勤講師(非常勤教員)として月16日勤務し教育委員会の講師などとなる。任期は１年で、更新は最大４回まで。勤務は常勤と同じ。給与は定年前の７割５分から８割程度。

大阪　小中の校長が現任校で再任用校長として勤務。今年度より校長から校長・教頭・教諭のいずれかで再任用となる。給与は定年前の7割程度。

長崎　管理職としての再任用はない。短時間勤務の再任用である。県教委が必要と認めた場合にはフルタイムもある。来年以降は、年金支給開始年齢に達するまで教諭としてフルタイムで勤務する。これまでは、退職後は市の嘱託として勤務する校長が多い。

沖縄　管理職としての再任用はない。校長・教頭は教諭としての再任用はある。25年以上勤続し定年後５年以内の希望者が対象となる。勤務体系はフルタイムである。

北海道　校長の再任用制度については、まもなく原案が提示される予定になっている。札幌や旭川などの大都市での勤務希望が多く、地方での勤務希望は少ない。単身赴任手当や地域枠手当なども検討されている。

＜質疑応答＞

Q　全国では、校長として再任用されるのは何県あるのか。

A　校長として再任用制度の県――６県
　　教諭等として再任用制度のある県――多数

Q　再任用で定年後も働く校長の場合の免許更新制度との関連はどうなるのか。校長は免許更新講習が免除されているが、教諭となった場合には免許更新をすることになるのか。

A　特に情報はないが、末尾が5の年齢で更新講習があるので、年金支給開始が65歳と考えると、それまでの更新された免許の有効期限が65歳となっているので大丈夫である。

５　連絡・その他

⑴　広報部より　大橋 広報部長

①　教育研究シリーズ等の購読協力依頼

②　全国特色ある研究校便覧の購読協力依頼

⑵　その他

６　閉会のことば　柿沼 副会長